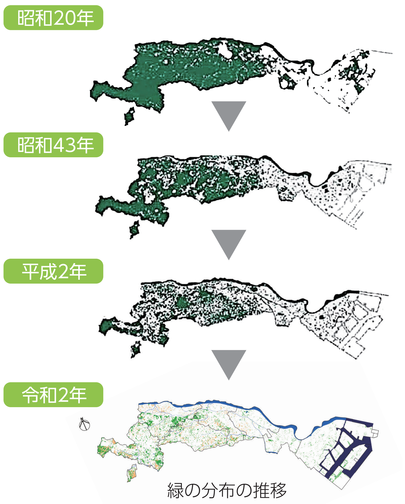
最新の環境課題と川崎市の取組⑥

自然共生

3

川崎市みどりの変遷と現状

川崎市は、多摩川の南岸約30㎞に沿った細長い地域で、北西部の多摩丘陵地、南東部の沖積低地、臨海部の埋立地からなっています。かつて北西部では、畑、果樹園、クヌギ・コナラ等の二次林、斜面林等の緑が豊富で、南東部では、二ヶ領用水の完成により水田地帯が形成されていました。これらが川崎市の緑の原風景となっています。しかし、明治時代後半から工業都市への道を歩み始め、自然環境の改変をはじめ各種の公害など、さまざまな都市問題を招き、特に活発な宅地開発の進行により、貴重な緑地資源が減少しました。



緑の分布の推移

川崎市の北西部には、かつての「里山」の風景が残されています。「里山」は、人の手が入ることで、多様な生態系が守られている緑地です。市内に残された多くの「里山」は、市民や様々な団体によって手入れされていますが、高齢化や後継者不足などの理由から活動を続けることが難しくなっています。それら課題に対応するため、保全してきた良好な自然環境に触れてもらう機会を創出しています。

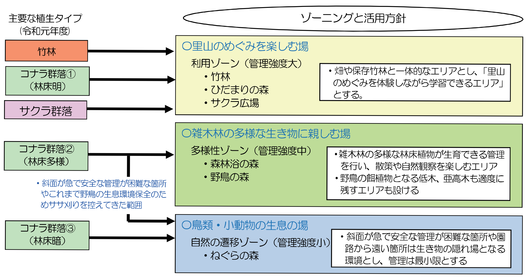
里山の風景（黒川よこみね特別緑地保全地区）

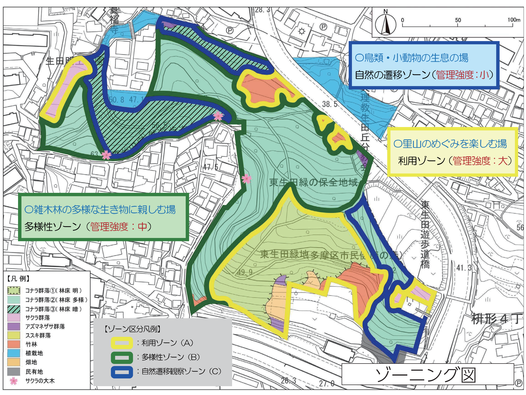
みどりを守る

地域住民の活動

地域住民等との協働により、ワークショップ方式で保全管理計画を作成し、保全緑地の適正な維持管理に努めています。また、この保全管理計画に基づいた管理実践を行うために、保全管理計画づくりに参加した方々を中心に活動団体を立上げ、その支援を行っています。

東生田緑の保全地域　保全管理計画





ゾーニング図